

## 【報告】 大学院教員として

— 学生と学んだ日々 —

泉 龍太郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

### A Life of GSSC teacher

— Studying with Students —

IZUMI Ryutaro

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this article, eleven years of experience as a teacher at this GSSC are described. Every student entered this school with his or her own thesis idea, and the role of the teacher is to cultivate their ideas and data, then finally to support and motivate them accomplish their master's or doctoral thesis within a limited time frame. Each student's thesis requires a wide range of knowledge, and it has been a very exciting experience to study with them. After introducing my own history, this article describes the master course program, five students' cases, discusses the importance of being open to the public, and finally the significance of this GSSC.

#### 1. はじめに

2024年9月7日に行われた大学院25周年記念シンポジウムの中で、退任記念講演として11年間の大学院教員生活を振り返ったが、本大学院の教員となった経緯を含め、その内容を本紀要に紹介したい。

#### 2. 大学院教員となるまで

##### 2.1 医学の道と、宇宙との出会い

元々医学部を志したのは、「人の役に立ちたい」という高尚な理由ではなく、もっと単純に「人間とは何か」を知りたい、というところが出発点で、そのためには医学であれば「人間」をいろいろな角度から勉強できるのではないかと、という動機だった（今から思えば必ずしも「医学」にこだわる必要はなかったが）。そのため、医学部卒業後は、基礎医学を重視している九州大学の第一内科に入局し、臨床研修を終えた後、大学院に進学して分子生物学を専攻した。ただ実験を重ねたり、論文を読んだりしているうちに、だんだん不満が嵩じてきた。当時はゲノム解析が行われる以前で、一つ一つの遺伝子の機能を

解析する時代であり、それはそれで重要ではあるが、この結果を積み重ねたところで「生命とは何か」が理解できるのか、疑問を感じたことが大きい。そんな時、手にした記事が、立花隆氏が著した「宇宙からの帰還」<sup>1)</sup>である。最初に掲載されたのは中央公論誌1981年のノンフィクション特集号で、その後の連載記事も合わせ、1982年に単行本として刊行された（今でも入手可能）。その内容に非常に衝撃を受け、宇宙に関心を持ち、やがて宇宙に行ってみたく思うようになった。

##### 2.2 宇宙飛行士への応募と、宇宙機関での仕事

第1回目の日本人宇宙飛行士の募集は1981年に行われたが、その時は応募する資格が無かった。1991年の第2回目はちょうど大学院在学時であり、研修医や大学院生としてのキャリアを加えると「実務経験3年以上」の資格を満たせるのではないかと考え、応募してみた。その結果、書類選抜と筆記試験を通り、第2次選抜試験に進むことができた。この時、第2次選抜試験を受けたのは40名強であるが、約10

名程度の4つのグループに分かれ、約1週間、入院して、各種の身体検査や試験を受けることになった。正にこの時出会った、同じグループのメンバーや選抜する側のスタッフ（宇宙開発事業団；当時）が、その後の人生の流れを変えることになった(図1a, b)。



図1a 選抜で同じグループとなった仲間



図1b この時の選抜で選ばれた若田光一飛行士  
(Photo by JAXA)

同じグループのメンバーは、皆が初対面であったにもかかわらず、全員が「宇宙への関心」が高く、また選抜試験を受けるだけあって、前向きな姿勢を持っており、すっかり意気投合した。さらにこの時に出会った選抜側のスタッフを通じ、その後、宇宙関係機関で、国際宇宙ステーション（International Space Station、以下「ISS」）の科学利用に関する仕事を受け持つことになった。最終的には宇宙航空研究開発機構（Japan Aerospace Exploration Agency、以下「JAXA」）で向井千秋飛行士の下、宇宙医学生物学研究の取り組みに関わり、また宇宙機関在任時に、当時 Flight

Surgeon（宇宙飛行士健康管理担当医）を勤めておられた宮本晃先生との出会いがあり、後日、宮本先生の後任として日本大学大学院の総合社会情報研究科に着任することになった。なお、本大学院を退任後、産業医も勤めたが、2024年度より再度、非常勤ながら JAXA の宇宙医学生物学研究グループに籍を置き、山本雅之プログラム・ディレクターの下で宇宙医学生物学研究の推進に取り組むことになった<sup>2)</sup>。

宇宙機関で受け持った業務は、医学・生命科学系の研究の取り纏めや、実際に宇宙で行う実験までの橋渡し等で、内容的には、ミクロレベルではタンパク結晶や分子生物学から、マクロレベルではヒトの精神心理や、船内環境の問題等、幅広い課題に対応することが求められ、それが大学院の教員として、いろいろな背景を持つ学生が持ち寄る、各々の研究課題に応じるのに、非常に役に立った。

また宇宙機関は公的機関であり、その体質は官僚的である。若い頃は自分自身が組織で仕事をするのに向いている性格とは思わなかったが、黎明期の宇宙医学生物学研究分野の立ち上げで周囲のサポートと理解もあり、それなりの苦労はあったが、やりがいを持って仕事に取り組むことができた。この宇宙機関で学んだ仕事のスタイルが、官僚的とも言われる日本大学での事務的な業務の対応に関して役に立った（と、自分では思っている）のは、皮肉な側面かも知れない。

### 3. 大学院教員として

#### 3.1 概要

日本大学大学院には2013年に着任し、2024年3月までの11年間に、合計で46名の学生を受け持った(表1)。

この中には、定年で退任するため、途中で受け入れた他の教員の学生も含まれる。また実際には、毎年だいたい1~2名、様々な事情で学業を中断し、退学する学生も居り、それぞれが止むを得ない事情を有していたが、むしろ途中で学業を離れた彼らに対し、今でも心残りを感じている。

表1 大学院在任時に受け持った11年間で修了した学生数

I	2014年度修了	6名
II	2015年度	2名
III	2016年度	4名
IV	2017年度	5名
V	2018年度	5名(1名は後期課程)
VI	2019年度	4名
VII	2020年度	6名
VIII	2021年度	1名
IX	2022年度	3名
X	2023年度	10名(3名は指導教員変更)
計		46名

### 3.2 大学と大学院の変遷

この間、2018年にキャンパスが所沢から市ヶ谷に移り、翌2019年には所管も本部から通信教育部へ移管され、大学院の体制にも様々な変更があった。2017年に人間科学専攻に、スポーツ科学専攻が加わったのも、大学院としては大きな出来事である。

その一方、アメリカンフットボール部のタックル問題や、前理事長の不祥事等で、日本大学自体が大きなダメージを受け、受験生が減ったと思われることや、教職員・在校生・卒業生のプライドが損なわれたのは、誠に残念でならない。

## 4. 通信制大学院の学修のプロセス

### 4.1 修士(前期)課程のプロセス

ここで簡単に修士(前期)課程における学修のプロセスを説明しておきたい。通信制なので、スクーリングを除いては対面式の授業は無く、選んだ科目のレポートを提出することで単位が認められる。科目には必修科目と選択科目があり、いずれも前期・後期合わせて4本のレポートを提出することで単位を得る。選択可能な科目は1学年で最大4科目であり、修了するためには、最低でも6科目、30単位が必要とされる(この内、6単位は修士論文の作成となる)。

スクーリングは3日間、集中的に行われる。以前は対面で行っていたが、2020年のコロナ流行により、

遠隔での授業を余儀なくされ、それ以降は、その年の事情にも依るが、対面を原則としながらも、遠隔やVOD配信を取り入れて実施している。またスクーリングは入学後、なるべく早期に行うことが望ましいと考えられたことから、現在は5月前半の連休中に行うことが多い。

### 4.2 修士論文の作成

本大学院は社会人向けであり、学生は自分で得たデータを基に、論文を作成することが原則である。通学制の大学院のように、研究室で取り組む研究課題があり、それを学生が分担する訳ではない。逆に言えば、自分自身でデータを取ることが難しい場合は、本大学院での論文作成は困難なことになる。ただ入学を希望する学生全員が、最初から研究課題や取得するデータが明確になっているかと言うと、決してそのようなことはなく、修士号は取りたいが、何をしたら良いか分からないという場合や、入学した後で研究テーマが全く方向転換するケースも少なくない。本大学院の教員の最大の役目は、入学した(あるいは入学を希望する)学生の研究課題を明確にし、2年間という限られた時間内にデータを整理し、論文を仕上げるように持って行くことである(現在は3年という長期履修制度もある)。

私自身の取り組みとしては、元々医療系の背景で、学生も看護師、理学療法士、放射線技師等、医療関係職の方が多かった。そのためもあり、可能な範囲で各学生がデータを取得する現場に行くことを心掛けていた。

### 4.3 学生生活

先に述べたように本大学院は社会人向けなので、ほとんどの学生は仕事を持ち、在学中は仕事と学業、更には家庭生活との両立を心掛けることになる。

学修の基本は、レポート提出による科目単位の取得、修士論文の作成、及びスクーリングへの参加だが、それ以外に、各ゼミで担当教員による個別の指導が行われる。多くの場合は、そのゼミに所属する在校生・修了生が定期的集まり、会合が開かれる(遠隔を含む)。また年に1回は、軽井沢等で、ゼミ合宿が行われるケースも多い(図2)。

ゼミを超えた集まりとしては、毎年9月末～10月初旬に開催される中間発表会（修士課程の場合は、参加は任意）とオープン大学院がある。またスクーリングの場も学生間の貴重な交流の機会となる。

なお博士（後期）課程の学修プロセスについては紙数の関係もあり、本稿では割愛する。詳細は大学院のホームページ<sup>3)</sup>等を参照されたい。



図2 2023年6月25日（日）軽井沢研修所におけるゼミ合宿（宮本先生のゼミ生を含む）。前列右から3番目が筆者、4番目が宮本晃先生。

#### 4.4 コロナの影響

2019年末から始まったコロナ感染症には本大学院の学修スタイルも大きな影響を受けた。元々通信制で、レポートや論文指導はインターネットを利用したものであったが、最も流行が大きかった時期は、スクーリング、入学試験、中間発表、卒業試験（面接諮問）全てがオンラインとなり、中には入学してから卒業するまで、一度も対面で顔を合わせることの無かった学生も居たぐらいである。今はコロナも落ち着き、適宜リモートも取り入れつつ、対面も重視する教育スタイルが取り入れられている。

### 5. 個別の学生指導

個別に担当した学生指導に関し、岩腰紀子さん、安田宗光さん、鈴木聖貴さん、天谷尚子さん（岡山敬二先生担当）、及び高橋涼香さんの5名の方との取り組みを紹介したい。

#### 5.1 岩腰紀子さん（2014年度修了）

岩腰さんは、摂食嚥下障害看護を専門とする看護師さんで、年齢は私と同じ、誕生日が若干早いので、実際は少し年上、という方だった。同じ時期に入学した学生の中でも年配の方だったので「かあさん」という愛称で親しまれていた。

研究テーマは、当然のことながら「摂食嚥下」に関する内容であった。より具体的に説明すると、「摂食嚥下」におけるリハビリ訓練では、この動作に関わる筋肉を増強するために、寝た状態で首を挙げる姿勢を取る（図3a）。この時、岩腰さんの同僚の言語聴覚士の方が、腕を挙げた方が、訓練の効果が高いことに気づき（図3b）、そのことを検証することを修士論文のテーマとして考えられていた。そのためには両方の姿勢で筋電図を計測して比較してみれば良いのではないかと思われ、実際に被験者を募って実験を行った。計測に当たっては、筋肉の形状には個人差があり、また皮膚の上から電極を当てなければならず、それなりに苦労はあったようだが、結果としては、両方の姿勢で有意差が見られ、腕を挙げた場合の訓練の効果が検証され（図4）、その結果を修士論文としてまとめることができた。

ただ後で残念に思ったのは、この研究のデータはあくまで健常人を対象とした基礎的なデータの取得であり、実際に臨床の場で、この方法の有効性が検証されていないことである。新たにデータを取らなくても、既に得られている患者のデータを活用すれば比較検討は可能と思われたが、現役の看護師ではそれ以上、研究活動に時間を割くことは難しく、修士論文としてまとめたところで終わってしまった。この結果に臨床のデータを加え、更には英語論文として出せば、それなりのインパクトは得られたであろうと思うと、今でも残念でならない（なお、本研究結果はその後、高山赤十字病院紀要として報告された<sup>4)</sup>）。



図 3a 頭部挙上運動（従来法；A 法）



図 3b 腕を挙げた改良法（B 法）

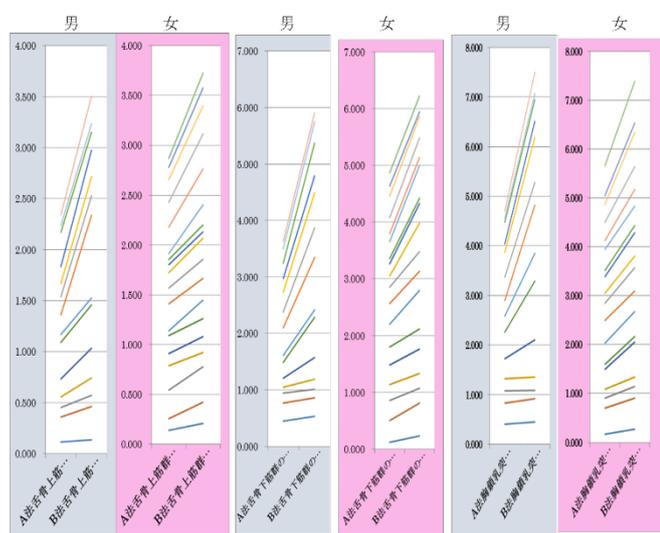


図 4 筋電図の計測結果：左より舌骨上筋群、舌骨下筋群、及び胸鎖乳突筋で、左側（グレー）が男性 14 名、右側（ピンク）が女性 18 名。筋電図面積を定量的に比較し、いずれの筋肉でも従来法（A 法；左）より改良法（B 法；右）の方が、負荷が高いことが示されている。

## 5.2 安田宗光さん（2017 年度修了）

岩腰さんの場合は、歳が上と言っても、同じ学年で誕生日が早いというだけだが、安田さんの場合は入学当時の年齢が 78 歳で、私より 21 歳年上であり、息子と言ってもおかしくないほどの年齢差である。安田さんだけでなく、私より上の年齢で入学された方は 6 名居た（修了された方のみ）。また安田さんは

本大学院の国際情報専攻を修了した後で、更に本大学院で学修を続けたいと私のゼミに入学された経緯があり、また人間科学専攻修了後は、文化情報専攻に入れ、そこでも修士号を取得された。

安田さんは家業として東京都内にある寝具店を経営されており、当時は既に、経営実務はご子息に譲られていた。研究テーマは高齢者の就業状況と健康寿命に関するものであり、実際に知人へのアンケート調査を取られたりして、論文としてまとめられた。その時よく議論になったのは、健康だから高齢でも働けるのか、働くことが健康寿命の延伸に繋がるのか、つまりニワトリが先か、卵が先かの議論で、未だに明確な結論を出すのは難しいようである。

この安田さん宅には 2016 年 7 月に訪問し、実際に布団打ちの手ほどきを受けた(図 5)。



図 5 安田さん宅で布団打ちの手ほどき  
左より筆者、久嶋佳奈さん（2017 年度修了）、村上忍さん（所沢キャンパスの隣人で、一時期、大学院に在籍）、安田宗光さん

## 5.3 鈴木聖貴さん（2018 年度修了）

鈴木さんは、義肢・装具等の製作に関わる会社に勤務されている方で、また同時に障がい者へのボランティア活動として、脊髄・頸髄損傷の方を対象としたチェアスキーに取り組んでおり、そのことを研究テーマとすることを希望して入学された。

私自身は、元々九州の出身であり、それまでスキーは全くしたことが無かった。スキーに触れたこともない人間が、スキーをテーマとした研究指導を行

うのもどうかと思い、所沢の人工スキー場に3回ほど行って見たが、3回ではせいぜいスキー板の付け方外し方と転び方を覚えるのが関の山だった。そんな状況ではあったが、2019年の2月に、蔵王で実際のチェアスキーを行う場に参加した。一行と一緒にリフトに乗って、ゲレンデの滑降口まで行ったのはいいが、皆はさっさと滑り降り、後に一人残され、せっかくなので山頂まで行って見たが、当日は天候が良くなって景色を眺めることもできず、当然のことながら滑り降りる技量も無いので、そのままリフトで下まで降りてくる他はなかった。この時はさすがに「蔵王まで何しに来たのだろうか」とやや自己嫌悪を感じたが、この蔵王行きが無駄だった訳ではない。

この時は前日から皆と近くのホテルに宿泊し、翌日の準備や論文作成に関する打ち合わせを行い、当日はチェアスキーを行う際の準備作業から立ち合った。実際に滑るのは頸髄損傷の方で、体温調節や排尿の機能も障害を受けているため、冬山でスキーをするためには、そちらのケアも必要とされ、そのために医療スタッフもボランティアとして同行し、体温等を計測しながらの活動であった(図6a、b)。近年はパラスポーツも盛んであるが、そのためにはどのようなサポートが行われているのか、非常に勉強になったことを実感している。



図 6a チェアスキーの準備状況



図 6b 実際に滑っているところ。後ろでサポートしているのが鈴木聖貴さん

#### 5.4 天谷尚子さん(2019年度修了;岡山敬二先生ゼミ生)

天谷さんは哲学を専門とする岡山敬二先生の指導を受けられていたが、ご本人の背景が看護師であることから、岡山先生ご了解の下、度々私のゼミでも一緒に勉強する機会が多かった。

当時の天谷さんは終末期医療において、「死と向き合うこと」をテーマとし、ハイデガーの哲学を基に論文に取り組みされた。その中で素晴らしいと思ったのは、本人が理解したことを図としてまとめられたことである(図7)。岡山先生が指導された学生は、他にも何名か副査を担当させて頂いたが、基本的に哲学の論文は文章のみで論理を構成するため、その内容を理解するのに労力を要する場合が多い。その中で天谷さんの論文では、理解したことを図で示され、その分かり易さに感銘を受けた。

もう一つ天谷さんで印象に残っているのは、大学院生当時、小学生の2人の子供が居られたが、母親が勉強する姿を見て、そのお子さん方も自ら机に向かうようになったと伺ったことである。他にも同僚が大学院で学ぶのを見て、本大学院に進学を決めた例も多い。このように学問を志す姿勢が、周囲に影響を与えることには非常に心強いものを感じている。

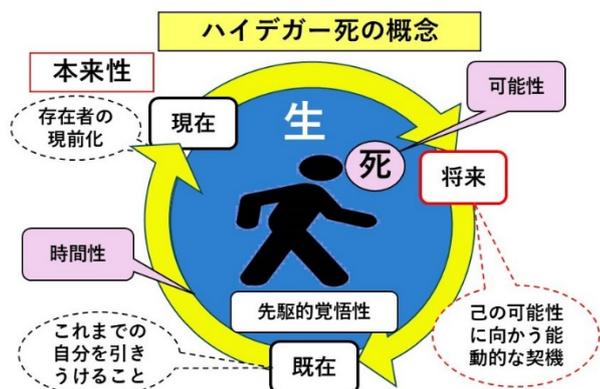


図7 天谷さんが作成した「ハイデガー死の概念」の理解



図8 日本大学 動物医科学研究センター (同研究センターのホームページより)

### 5.5 高橋涼香さん (2023 年度修了)

高橋さんは、私が担当した最後の学年の1人である。研究課題として哲学と動物倫理を希望していたが、私自身がたまたま JAXA で長らく実験動物の倫理に関わる業務を担当していたことから、動物倫理であれば指導可能と、受け持つことになった。JAXA の動物実験委員会には生物資源科学部の森友忠昭先生が参加しておられたことから (当時)、森友先生にお願いして獣医学科を一緒に見学させてもらった (図8)。また同じく動物実験委員会のメンバーであった久原孝俊先生 (順天堂大学医学部; 当時) より日本動物園水族館協会 (Japanese Association of Zoos and Aquariums、略称「JAZA」) に関わっておられる山梨裕美先生を紹介してもらい、話しを聞きに、京都市動物園まで出向いた。それ以外にも現地調査として、おたる水族館 (図9) やサンピアザ水族館 (札幌市内) を訪問した。おたる水族館では事前に調査研究であることを連絡し、飼育管理を担当している角川雅俊氏に、飼育の現状について、いろいろ案内をして頂いた。水族館や動物園には、長らく行ったことがなかったが、これらの施設がどのように運営・管理され、また社会的にどのような位置付けであるのか、非常に興味深かった。



図9 おたる水族館のペンギン (高橋涼香さん撮影)

## 6. 最後に思うこと

### 6.1 研究発表の重要性

最後に主張しておきたいのは、取り組んだ研究を発表することの重要性である。現在、日本では、修士論文は一般的には公開されていない。日本大学大学院でも、開示する範囲は、論文を作成した本人の了解の下で、大学院生、修了生に限定されるのが原則である。そのこと自体を否定するつもりは無いが、その一方で、研究倫理の観点からも、人的・資金的労力を掛けた研究活動の成果は、何らかの形で公開することが推奨されている。修士論文自体を公開することはできなくても、その内容を学会で報告すれば、少なくとも抄録という形で残すことは可能である。この研究結果の報告の重要性は、2017年度修了の久嶋佳奈さん (図5) も強調しておられたが、私自身、25周年記念シンポジウム場で伝えることがで

きなかったため、今回、紀要の報告として、改めて主張する次第である。

## 6.2 通信制大学院の位置付け—最後に

最後に、正直に言えば、私自身は先に述べたように、組織に所属すると同時に、他人に教育することに向いている、つまり教師になるような人間ではないと思っていた。それが結局、本大学院に11年間在籍し、多くの学生と一緒に学問に取り組み、非常に充実した時間を過ごすことができた。また私自身、数多くの知識と分野に接することができ、自分自身の世界が広がったことに感謝している。これに関するキーワードを一つ上げるとすれば、それは「知的好奇心」に他ならない。

先に述べたように、各々の入学希望者が持ち寄る研究課題は、多くの場合は職場、あるいは自分自身で感じている矛盾点、改善点が出発点となっている。職場での経験で解決できない、あるいはアプローチが困難な課題に対して、どのように対処したら良いのか、そのためには現在の自分自身の知識や経験では限界がある、そう感じた方が入学を希望される例が多い。それに対し、どのようにアプローチし、また同時に本人のキャリアアップ、及び職場や本人自身の問題点の改善に繋げることが可能なのか、一緒になって考えることが社会人大大学院の本来の目的ではないかと思うに至った。そしてそれはまた、どんなに小さくても、(大袈裟かも知れないが)人類社会の知識の蓄積となり、次のステップの第一歩となることを確信している。

人生100年時代と言われている現在、社会人の再教育の視点もあるかも知れない。そしてその中で、本大学院のシステムは、非常に素晴らしい存在であることを実感している。ただ残念なのは、本大学院の存在が、日本大学の中でさえ、あまり知られていないことである。レベル的には決して放送大学にも引けを取らないと思われる一方、時にはその存続が危ぶまれたこともあったが、今後の、本大学院の発展を切に祈念する次第である。

## 謝辞

本稿をまとめるに当たり、特にGSSCの体制や修了プロセスに関し、ご助言を頂いた本大学院の保坂敏子先生、島田めぐみ先生、また一緒に学業に従事した教員・学生の方々、並びにご支援頂いた事務職員の皆さまに深謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 立花 隆 「宇宙からの帰還」 中央公論社 1985  
(2020年に同社より新版の文庫本として出版)
- 2) JAXA HP  
<https://humans-in-space.jaxa.jp/biz-lab/news/detail/004222.html>  
(参照：2024年12月9日)
- 3) 日本大学大学院総合社会情報研究科 HP  
<https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/>  
(参照：2024年12月19日)
- 4) 岩腰紀子、他 「負荷を加えた頭部挙上訓練の検討」 高山赤十字病院紀要 (vol.40) p.38-42、2016

(Received: January 17, 2025)

(Issued in internet Edition: February 1, 2025)